小野小町の歌二首　―小野小町の古画にそえて―

髙城弘一（竹苞）
Koichi（Chikuho）Takashiro

拙作の題材であるが、伝藤原行成筆『歌仙歌合』（藤原公任撰『三十人撰』）所収の小野小町の歌二首である。『歌仙歌合』は、「高野切第一種」系統で、二首とも『古今和歌集』に採られており（巻十二恋二・五五二、巻十五恋歌五・七九七）、ともに小町の名歌として、人口に膾炙する。

この数年、古い歌仙絵にその歌仙詠歌を書き組み合わせて、一つの作品となるような創作活動を行っている。『大東書道研究』第二十号（大東文化大学書道研究所、平成二十五年三月）において、「坂上是則の歌三首」を発表し、同第二十二号（同、平成二十七年三月）において、「斎宮女御の歌二首　―斎宮女御の古画にそえて―」を発表した。

今回の古い歌仙絵（貼交屏風崩し）に付属する、古筆了佐（一五七二～一六六二）の極札によると、筆者は飛鳥井雅章（一六一一～一六七九）となっている。絵の方は絵師が描くので、書の方に対する極めであろう。虫ナメによってかなりの傷みを有するが、かろうじて「小野小町」と読める。絶世の美女、小町の姿もここまでくると痛々しい。野外に放置された死体が朽ちていく姿を九段階に分けて描いた九相図（九想図とも）という仏教絵画があるが、小町もその主人公とされた一人。まさにそれを連想したが、書と組み合わせるならば、小町が目立たない方が好都合ということにしておきたい。

潤渇・太細の変化をつけ、奥行きが出るようにした。さらに、余白の美を探求したものの、大胆かつ奔放さも表現した書き下ろし作品である。料紙は、数十年ほど前の薄手の染め紙（雁皮）で金銀や色箔が撒かれている。かなり枯れていて、書き心地が抜群。筆は、イタチ毛の柳葉筆（神技堂製「大三岳」）で、墨は、舟形「公」（呉竹製でやや古め）を用いた。落款印は、本学中国学科卒業・鳥山駿太郎氏刻を使用。

右　34.7×25.1cm
左　34.7×30.1cm

【釈文】（右傍ら」は字母　／は改行）

非　者　牟　利　八佐　万

おもひつゝぬれはや／人の見えつらむゆめと／しりせはさめさらま

越

／しを

八　能奈可　能　爾曾

いろ見えてうつろふものは／よのなかの人のこゝろの／花にそあり

介

け／る